

「第3回語り場」のやや詳しい報告

2021年10月9日(土)14:00~16:10に開催した「第3回語り場」のやや詳しい報告です。

今回も初めての参加者が多かったので、仁徳地域商会の設立経緯の説明と出席者の簡単な自己紹介を行いました。参加者は、会場が全員で16名、ZOOMによる参加が1名でした。

まず初めに、会員の児玉純子さんが「私と仁保〜ご縁に感謝〜」と題して、煩わしさはあるもの“田舎暮らし”の良さについて熱く語られました。山口市の小郡地域に暮らしていたが、ご主人の単身赴任を契機に、ご主人の実家のある仁保地域に住むことにされたそうです。しかも、たまたま実家の隣の家が売りに出され、早速購入されました。人数の少ない地域での子育てを通じての出会いは濃密で、この密な関係の有難さを感じられたのは、娘さんの大変な病気の際だったと、つらいご経験をお話してくださいました。食の大切さを感じるようになり、食育指導士とされます(現在は上級食育指導士となっております)。子育てサークル、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、成人といった幅広い年代との関わりの中で、学んできたことが途切れていることを痛感されたそうです。しっかりと子供たちに食の大切さを伝えることが重要だと、ますます感じられました。

そのため様々な活動に参加されます。仁保地区母子保健推進員(母推さん:市から依頼を受け、地域子どもさんとお母さんの健康を守るために、身近な子育てサポーターとして活動)を対象とする「すくすく学級」では、食の大切さやどのような食品を食べるといいのかといったことを、紙芝居などを活用しながら説明されています。また子どもたちに少しでも安全安心な給食が提供できるようにと、仁保小学校の保護者有志が集まって「くすっと地給地足の会」を立ち上げられます。色々と話し合う中で、学校にお願いするだけではなく、保護者の皆さんとのコミュニケーションを取ることや食に対する意識向上を図ることが大切であることから、地域食堂「くすっと食堂」を始められます。地域の野菜を使っての料理を作られるだけでなく、噛むことの大切さのお話をされ、その後噛む回数を競走し、なんと600回も噛んだお子さんもいたそうです。また玄米と分付き米の違いを味わったり、みんなで食べるおいしさを実感したりと、子どもたちが楽しみながら学べる話をされ、催しが終わってから、「また来たい人?」と聞かれたら、全員が「また来たいー!」と手を挙げられたそうです。

最後に会場からの質問に答えてくださいました。

Q: 体によい食材を子供に提供したいと思うが、時間的になかなか余裕がない。

工夫する方法はないか。

A : ハードルを下げて、頑張りすぎないことが大切。例えば前の夜に煮干しを入れておけば化学調味料を使う必要がない。さらに両親が“田舎暮らし”を真剣に取り組んでいる後姿を見せれば、十分お子さんには伝わっていると思う。

いわゆる“おばちゃんの知恵”のようなものが手軽に入手できると、“田舎暮らし”ももっと楽しみやすくなるのではと感じました。

Q : 生産者として安全安心の食材の提供に努めても、結局は値段の安さに消費者は流れ、生産者の思いに応えてくれる消費者は少ない。顔の見える関係をどう作り上げていけばよいか。

A : 生産者と消費者とが同じテーブルに付いて話し合い、協力しながら進める努力を地道に進めるしかないのでは

さて児玉さんは、トランペッターでもあります。煩わしさに敬遠されがちな“田舎暮らし”を、良き仲間と一緒に楽しんでおられます。

次いで会員の鈴木啓二郎さんが「アートを通じた地域活性化」と題して、現代美術作家の視点と仁保・徳地の地域資源について話してくださいました。

山口市に來られてからの取組のうち仁徳地域に関連するものについて語っていただきました。

まずは、山口大学アカデミックセンターや Creative Scotland などが主催された「the Rock Cycle Yamaguchi (リサーチ)」という国際的な協力を得て実現した3年にわたる科学と芸術の融合を目指した企画についてです。海外アーティストとコラボされた折、仁徳地域の地域資源として徳地手漉き和紙《特徴：素材の良さが生かされた素朴な風合いで、心地よく柔らかな手触り、しなやかな丈夫さもある。加工方法によってはさまざまな特性を引き出せ、その表現は無限に広がる》を素材として採用されたそうです。こうぞ(楮)やみつまた(三桠)が育つ山に行かれたり、「千々松和紙工房」での和紙の製造過程を見学されたりと、徳地手漉き和紙の全てを体感された上で作品づくりに取り組まれました。残念ながらコロナ禍でスコットランドへ行っての制作については、延期されているそうです。

続いて、やまぐち街なか大学で開催された「こどもとアート」について語られました。「観察力、分析力、判断力、想像力、発想力、記憶力、表現力を育てよう」と、仁保地域交流センターから隕石の落ちた信行寺までの観察ウォーキングをされたそうです。仁保にはKDDIのパラボラアンテナもあり、隕石と併せて宇宙との繋がりが深い地域といえるのではとお話されました。

この隕石は、1897年(明治30年)8月8日午後10時30分頃、山口市仁保中郷・井開田東、信行寺付近に2個、山口市宮野上・河原付近に1個落下したそうです。落下100年を記念して、仁保隕石の記念碑が信行寺境内に建立され、落下してきた方向や、およその高度がわかるように作られているのだそうです。(ネットより)

鈴木さんのテーマを受けて登場されたのは、役員でもある末永光正さんです。末永さんは、仁保在住で“百壺姓”として「時感」をテーマにした作品制作をするアーティストでもあります。アートを通じた地域づくりのヒントなどについて話してくださいました。二足歩行を始めた人類は手が自由となり、全ての人がクリエイターになった。つまり誰もがアーティストであると語られました。農村は劇場空間であり、作品づくりや発表の場だともお話しされました。さらに、この中山間地域をアートのプラットホームにしたいという夢も語られました。

これらの話を聞かれて、前回の語り人阿部果奈子さんが、末永さんが語られたとおりのことを実践されている様子をお話してくださいました。色の異なる5種類の古代米を混ぜて植えその偶然性を楽しんでいることや刈った稲を干す“はぜかけ”には地域や個人によって特色があり、その美しさを堪能しておられるのだそうです。いつかの機会に語ってほしいなと思いました。アートの話はやや難しいかなと思っていましたが、全くの取り越し苦労で、思いのほか盛り上がったように感じました。

また会員の山本豊さんからは、仁保の郷土史を研究したいので一緒に参加してくださる方を募集したいとの発言がありました。郷土史も地域づくりにとって重要なテーマです。ご興味のかる方はぜひお知らせください。

さらに鈴木さんの発表の中で出た「千々松和紙工房」の元代表千々松哲也については、高校生が日本のさまざまな地域で暮らす森・川・海の名人を訪ね対面で聞き書きする「聞き書き甲子園」(<https://www.kikigaki.net/>)の来年度の名人として推薦していると、市原茂さんから報告がありました。その結果の発表が10月13日にあり、見事、採択になったそうです。徳地を全国に向けてPRできる機会ができたこと、市原さんは意気込んでおられます。

折角の場合なので、もっと多くの方、特に仁徳地域の方々に参加してもらえるように工夫すると良いのでは、といった意見がありました。最近ではZOOMという便利なツールがあり、家に寝っ転がっていても参加できるので、もっと多くの人に参加してもらおうにするといいのではといった意見です。もっと広報する必要もありますし、工夫の余地もあります。

発表された皆さん、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。
また参加された皆さん、ありがとうございました。

幾人かの方に感想をいただきましたので、語り場の雰囲気をもっと感じていただくために、ご紹介します。

- ・今日は面白く有意義な会に初参加させていただきありがとうございました。「アート」で盛り上がった「第3回語り場」でした。次回はどんな話題で盛り上がるのか、楽しみです。

- ・規模は小さいかもしれませんが、地域の取組を地域の人がまだまだ知らないという課題に貢献されているなど実感しました。次回も楽しみにしております！
- ・今日は多くの方々との出会いを作っていただき、ありがとうございました。限られた時間ですが、中身の濃いお話を聞くことができました。
- ・素晴らしい話が聴け、素敵な仲間を知ることができました。

